

歴史の始まり

真名鶴酒造は、宝暦年間（江戸時代中期）当地にて酒造りが始まり、創業時の屋号は「丸屋」酒名を「亀乃尾」と云いました。その後、江戸時代の末頃になり、酒造りに来ていた者の中に真面目で酒造りの才ある蔵人があり、長く筆頭番頭を努めた後、主人から絶大な信頼を得て蔵の経営を任され、初代泉善助として蔵元となりました。

その後長きに渡り、銘酒「亀乃尾」は地元でも評判のいいお酒として愛されて参りましたが、三代目泉善助の時には、太平洋戦争による企業統制により休造を余儀なくされました。しかしながら、平和な時代の訪れとともに再び酒造りの情熱が高まり、初代の生誕地である真名川上流の旧西谷村に伝わる「麻那姫伝説」に登場する「村人を飢饉から救うため自ら生贄となった麻那姫が、姿を変えて舞い上がったという美しい鶴」になぞらえ、酒名を新たに「真名鶴」として復活を遂げました。



新しい酒造り

平成十年からは、五代目蔵元となる泉恵介が自ら杜氏となり、新しい体制での酒造りを始めることとなりました。そしてこの年、杜氏として初めて造った大吟醸酒が、福井県の唎酒会で最高点を獲得、続く金沢国税局酒類鑑評会、全国新酒鑑評会でも金賞を受賞するという快挙を達成、一躍脚光を浴びることとなりました。

この年の受賞酒の一部は、初代善助の頃に建てられた古い土蔵倉の中で大切に保管されてまいりましたが、じっくりと熟成を重ねることで、大吟醸酒本来の華やかさに、力強い香りと重厚でまろやかな味わいに加わり、琥珀色に輝く至高の秘蔵酒へと変貌を遂げました。私の酒造りの原点、心の拠りどころでもある記念の受賞酒ですが、時代の大きな変革期でもあるこの時に、古い自分と決別し、新たな酒造りへの挑戦と真名鶴酒造の更なる発展を誓い、日本復興への願いも込めて、今、クリスタルガラスのデキャンタに詰め、特別限定発売いたします。



至上の器

この酒を発売するにあたり「ただの商品ではなく作品といえる物にしたい」との思いが高まり、石川県輪島を代表する蒔絵師「田崎昭一郎」氏に、当蔵の歴史を題材にした金蒔絵を、特別に描いていただきました。

また、この秘蔵酒をお楽しみいただくために、臙脂と漆黒の漆が施され、田崎昭一郎氏によって鶴と亀の文字が描かれたグラスがセットされています。このグラスは、オーストリアのワイングラスメーカー「リーデル」の日本酒グラスを用い、有限会社ライフ・アートの佐藤丙午氏によってプロデュースされたものです。

さらに、神代杉を使い日本の古い家屋に見られる格子戸をイメージした飾り箱をご用意いたしました。お酒をお飲みになられた後には、デキャンタの収納ケースとしてお使いいただき、格子の隙間から見える金蒔絵の風景をお楽しみください。

